

保の改革)とは真っ向から対立するものでした。一方、宗春のこうした政策は、やがて尾張藩政に行き詰まりを生じ、城下の風紀が乱れたり、宗春自身の行動が問題になったりしました。こうしたことから、宗春は、1739年(元文4)正月、幕府から蟄居謹慎を命じられました。



宗春をモデルにした芝居絵  
『享保尾事』所収/徳川林政史研究所蔵

に力を尽くしたほか、幕府の政治にも深くかかわっていきました。

ペリー来航による開国後の日米通商条約の調印問題や将軍継承問題などで、時の大老・井伊直弼と対立したおりには、無断で江戸城へ登城したことから、蟄居謹慎を命じられました。

慶勝には、義比(尾張家では茂徳。後に一橋徳川家当主・茂栄に)・容保(後に会津松平家当主・京都守護職に)・定敬(後に桑名松平家当主・京都所司代に)の3人の弟たちがいました。

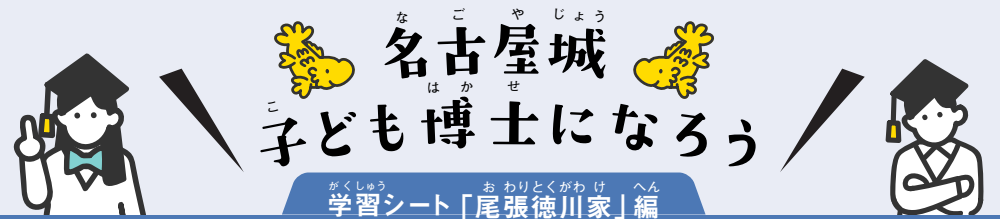
慶勝は、1868年(慶応4)に鳥羽伏見の戦いが始まると、さまざまな状況から新政府側につききました。そのため、当時幕府側に立っていた二人の弟、容保・定敬とは対立関係にならざるを得ないということもありました。



徳川慶勝肖像写真(徳川林政史研究所蔵)

### 激動の時代を生きた殿様 14代 徳川慶勝

14代慶勝は、将軍家などから送り込まれた養子の当主が続いた後、尾張徳川家の分家、高須松平家から本家の養子に入って当主になりました。慶勝が当主になった時代は、幕末の激動期でしたが、尾張藩の政治改革や財政立て直し

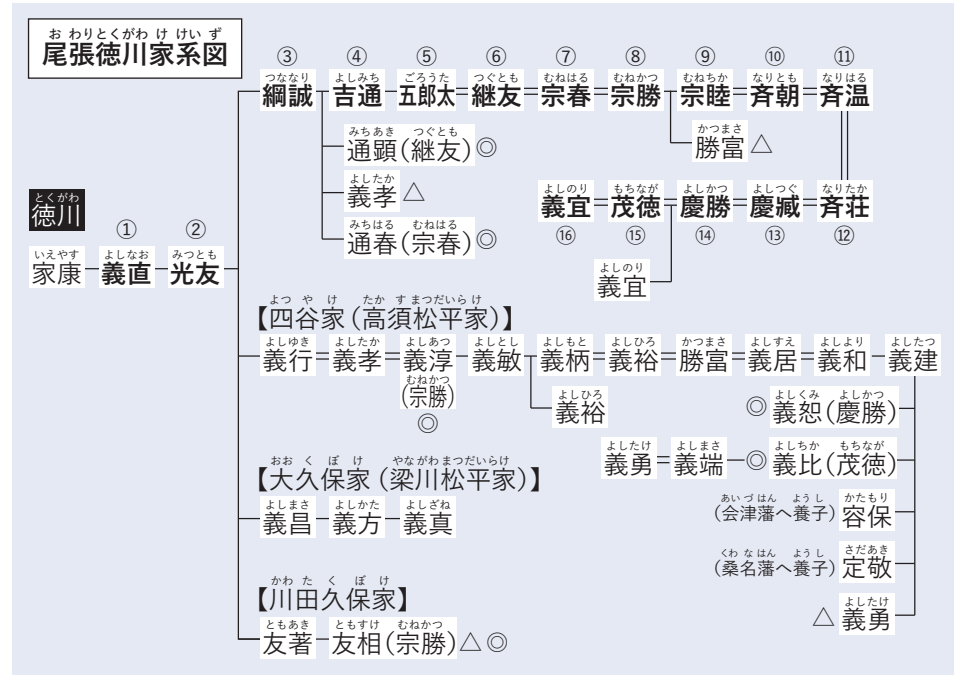


## 一尾張徳川家はどんな大名だったのでしょー

尾張徳川家(尾張藩)は徳川義直から始まりました

尾張徳川家(尾張藩)は、徳川家康の9男・徳川義直から始まります。初代当主(藩主)義直の血筋は、9代宗

睦まで続きましたが、10代斉朝から13代慶藏までは、将軍家やその血筋から養子を迎えてきました。そして、14代慶勝と15代茂徳は、尾張徳川家分家の高須松平家からの養子です。こうして、江戸時代の尾張徳川家は、16代で約260年続きました。



(注) =は養子相続/太字は藩主/◎は尾張家へ養子/△は高須松平家へ養子

おわりとくがわけ  
尾張徳川家は  
とくがわごさんけひつとう  
徳川御三家筆頭で  
もつとかくしきたかだいまよう  
最も格式の高い大名でした

とくがわいえやすちうけい いちもん うち おわり  
徳川家康直系の一門の内、尾張・  
紀伊・水戸を徳川御三家といいます。  
おわりとくがわけ ひつとう しよだいまよう  
尾張徳川家はその筆頭にあり、諸大名  
なかもつとかくしきたかだいまよう しよぐん  
の中で最も格式の高い大名で、将軍  
家中に跡継ぎがいなくなった場合には、  
しよぐん だ だいみょう  
将軍を出すことができる大名でした。

おわりとくがわけ だいよしみち だいづく  
尾張徳川家には、4代吉通・6代継  
とも しよぐん だ  
友のとき、将軍を出せるチャンスがあり  
けつか ひつとろ しよぐん だ  
ましたが、結果は一人の将軍も出すこ  
とができませんでした。

だいみつとも  
2代光友は  
おわりとくがわけ そんぞく かんが  
尾張徳川家の存続を考え  
みつぶんけ た  
三つの分家を立てました

おわりとくがわけ だいみつとも むすこ  
尾張徳川家には、2代光友が息子に  
たぶんけ  
立てさせた分家があります。

よしゆき しよだい たかすまつら  
それは、義行を初代とする高須松平  
けよつやけ よしまさ しよだい やながまつ  
家(四谷家)、義昌を初代とする梁川松  
だいらけ おおくほけ ともあき しよだい かわ  
平家(大久保家)、友著を初代とする川  
たくほけ さんけ  
田久保家の三家でした。

ぶんけ ほんけ おわりとくがわけ あと  
この分家は、本家の尾張徳川家に跡  
つたばあい そな じっさい  
継ぎが絶える場合に備えたもので、実際  
たかすまつらけ だいわねかつ  
に、高須松平家からの8代宗勝(生まれ  
かわだくほけ だいにしかつ だいまちなが  
は川田久保家)、14代慶勝、15代茂徳

おわりとくがわけ つ  
が尾張徳川家を継いでいます。

おわりとくがわけ かもん  
尾張徳川家の家紋は  
ずあんか  
フタバアオイを图案化した  
「葵紋」でした

みぎず おわり  
右の図は、尾張  
とくがわけ かもん あおい  
徳川家の家紋、「葵  
もん いちれい  
紋」の一例です。

あおい  
葵は、フタバアオ  
イというハート形の

はにまい しよくぶつ なまえ  
葉が二枚ついている植物の名前です。  
あおいもん さんまい はさき  
「葵紋」は、フタバアオイの三枚の葉先  
えん ちゆうおう つ あ かたち なら  
を円の中央に突き合わせる形に並べた  
もんしよう おわりとくがわけ しよだいよしな  
紋章です。尾張徳川家では、初代義直  
いらい あおい もんよう いふく はたはこるい  
以来、葵の紋様を衣服や旗、箱類など  
いろいろなものに使用してきました。す  
べて同じ形ではなく、時代によって少しず  
へんか とき ばあい さまざま  
つ変化し、また、時と場合によって様々  
あおいもん えが  
なデザインの葵紋が描かれてきました。

おわりとくがわけ  
尾張徳川家は  
おわりいっこく ほか ちく  
尾張一國と他の5か国にも  
りようち だいだいまよう  
領地をもつ大大名でした

おわりとくがわけ りようち じゅんじ かぞう  
尾張徳川家の領地は、順次加増さ  
おわりいっこく みの みかわ おうみ せつ  
れ、尾張一國と美濃・三河・近江・摂  
つしなの こく とびち  
津・信濃の5か国にも飛地があり、さら  
きそやまりようち こうだい りようち  
に木曾山も領地でした。広大な領地の



こうしき こくだか まん こく  
公式の石高は、61万9500石でしたが、  
しんでんかいはつ ぞうしゆう きそやま ざい  
新田開発による増収や木曾山からの材  
もくしゆうにゆう くわ えどじだいちゆうき  
木収入などを加えると、江戸時代中期  
いこう じつだか まんごく まんごく  
以降には、実高は90万石から100万石  
ちか  
近くあったといわれています。

また、尾張國に住んでいた人々の人  
こう えとじしよき ねん えんぼう  
口は、江戸初期の1674年(延宝2)に  
は37万8031人でしたが、幕末の  
1852年(嘉永5)には、65万7858人で、  
ねん かえい まん にん  
約1.7倍の人口になっていました。

はんせい きそかた ぶん ぶりようどう とのさま  
藩政の基礎を固めた文武両道の殿様  
しよだい とくがわよしな  
初代 徳川義直



とくがわびじゅうざう  
(徳川美術館蔵)  
©徳川美術館イメージアーカイブ/DNPartcom)

おわりとくがわけ しよだいらいしよ よし  
尾張徳川家の初代当主になった義  
なほ さい こうふしゆうしよ けい  
直は、4歳で甲府城主になり、8歳で  
おわりくに きよすしゆうしよ ちち  
尾張國の清須城主になりました。父の  
いやす かんどう かんもん のうびへい や  
家康は、関東への関門になる濃尾平野  
まも かた しはい きよてん きよ  
の守りを固めるために、支配の拠点清  
す ねごや うつ せいぎく  
須から名古屋に移すことにし、名古屋

しよきぎ よしな おしよだい じよしゆう  
城を築き、義直を初代の城主にしました。  
よしな お ねん けいちよう おおさか  
義直は、1614年(慶長19)の大坂  
ふゆ じん とよとみがた たたか ういじん かざ  
冬の陣(豊臣方との戦い)で初陣を飾り、  
よくねん なつ じん しもつじん よしな  
翌年の夏の陣にも出陣しました。義直  
せいしきき なごや にゆうごく ちちいえ  
が正式に名古屋に入国したのは、父家  
やす な ねん げん な  
康が亡くなった1616年(元和2)、16  
さい  
歳のときでした。

よしな お みずか はん せいじ おこな き  
義直は、自ら藩の政治を行い、その基  
そ かつた のうぎようよう いけ しん  
礎を固めたほか、農業用のため池や新  
でんかいはつ すず こめ ぞうしゆう つと  
田開発を進めて米の増収に努めました。  
また、学問や武道にも励み、特に儒学を  
がくもん ぶどう ねん げん じゆがく  
奨励するとともに、『類聚日本紀』(歴史  
しようれい んじじゆにほんぎ れきし  
書)や『神祇宝典』(神社に関する書物)  
しよ じん きほうてん じんじや かん しよもつ  
を著わすなど、数々の実績をあげました。

だいらいぐんむねはる たいこう とのさま  
8代將軍吉宗に対抗した殿様  
だい とくがわむねはる  
7代 徳川宗春

むねはる やながわはん まんごく どうしゆう  
宗春は、梁川藩3万石の当主でした  
おわりとくがわけ だいらいぐんききゆうし  
が、尾張徳川家6代継友の急死により、  
だい つ  
7代を継ぐことになりました。当主を継ぐと、  
おんちせいよう あら せいじ ほうしん  
『温知政要』を著わして政治の方針を  
かしん しめ せつきよてき けいざい はんえいさく  
家臣に示し、積極的に経済の繁栄策を  
じっし しはい まつ しようれい  
実施したり、芝居や祭りなどを奨励した  
りしました。そのため、城下の商業や芸  
ごと さか こんにち げい  
事などが盛んになりました。今日、「芸ど  
なごや きそきぎ とのさま  
ころ名古屋」の基礎を築いた殿様とい  
りゆう むねはる せいさく  
われる理由です。しかし、宗春の政策は、  
どうじ だいらいぐんききゆうむねすず しつ  
当時の8代將軍徳川吉宗が進める質  
そけんやく ざいせいし せいさくきよう  
素儉約や財政引き締めなどの政策(享